

健胃薬

製品群No. 11

ワークシートNo.9

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
酵母	乾燥酵母 「ホエイ」	乾燥酵母は含有する糖成分が総合して栄養補給、代謝機能促進、食欲増進、整腸などの薬効を現す。				頻度不明(大量投与による下痢)						大量で下痢		乾燥酵母として、通常成人1日5~10gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンB群、たん白質の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給	
	塩化カルニチン	アベダイン液	副交感神経興奮薬。胃液中のペプシン量と総酸度の増加			頻度不明(胸やけ、嘔気等)		過酸症(増悪)、急性膵炎又は慢性膵炎で急性増悪がみられる(症状が増悪)	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、新生児・未熟児					塩化カルニチンとして、通常成人1日100~600mg(本剤1~6 mL)を3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	消化管機能低下のみられる慢性胃炎	
胃腸機能調整成分	マレイン酸トリメブチン	セレキノン錠	胃腸機能調整薬。運動調節作用、運動機能障害			0.1%末添(便秘、下痢、腹痛、口渇、口内しびれ感、悪心、嘔吐、心悸亢進、眠気、めまい、けん怠感、頭痛、AST(GOT)・ALT(GPT)の上昇、排尿障害、尿閉)	0.1%末添(過敏症)		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、小児				1.マレイン酸トリメブチンとして、通常成人1日量300mg(錠3錠、細粒1.5g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。 2.マレイン酸トリメブチンとして、通常成人1日量300~600mg(錠3~6錠、細粒1.5~3.0g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。	1.慢性胃炎における消化器症状(腹部疼痛、悪心、あじき、腹部膨満感) 2.過敏性腸症候群		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく習慣性	禁忌(重篤な副作用につながるおそれ)	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	使用法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用方法(誤使用のおそれ)			用法用量	効能効果	
乳酸菌成分													
アシドフィルス菌末													
ビフィズス菌末	ビフィダー	ビフィズス菌は、腸内で増殖し、乳酸と酢酸を産生して腸内菌叢の正常化をはかり、整腸作用をあらわす(ビオフェルミン錠)					頻度不明(軟便)					通常、成人1日3～6錠を3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	効能又は効果 腸内菌叢の異常による諸症状の改善
ラクトミン	フソウラクミン末	ラクトミンは、腸内菌叢異常の原因を除き、パランスの回復、諸症状の改善に有効										通常成人1日3～9gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
ラックビー	ラックビーラックビー微粒	腸内菌叢改善作用。健康成人に本剤を投与したところ、ビフィズス菌が増殖し、腸内の優勢菌叢を増し、腸内菌叢の正常化を促すとともに、ビフィズス菌により産生される酸により、腸内pHを低下させ、有害細菌が増殖しにくい環境をつくる。				アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1～5%未満(腹部膨満感)	本剤過敏症の既往歴、牛乳に対してアレルギーあり【アナフィラキシー様症状を起こす】				通常成人1日3～6gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
ラクボン	ラクボン	本剤は腸管内で発芽・繁殖し(マウスの実験から)、乳酸を産生して腸内の腐敗細菌群の増殖を抑制して、整腸作用を営										通常成人1日3～6gを3回に分割経口投与する。小児は通常1日1.5～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
酪酸菌成分	ミヤBM細粒	腸内細菌に対する作用、化学療法剤投与時における整腸作用・その他整腸作用を有する										腸内菌叢の異常による諸症状の改善	通常、成人1日1.5g～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)							
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの							特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの					過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
でんぶん消化酵素	ジアスターゼ	ジアスターゼ	アミラーゼとしてでんぶん分解をする。														1回0.3～0.5g、1日3回、適宜増減	主として炭水化物の消化異常症状の改善			
	ジアスマン	単味なし					5%以上または頻度不明(過敏症)														
蛋白消化酵素	ニューラーゼ	単味なし																			
	プロザイム	単味なし																			
脂肪消化酵素	ホリバーゼ	単味なし																			
	リバーゼ	単味なし																			
繊維消化酵素	セルラーゼ	単味なし																			
	セルロシン	単味なし																			
複合消化酵素	タカヂアスターゼ	タカヂアスターゼ	主として炭水化物の消化				頻度不明(過敏症)										1回0.2～0.3g、1日3回、適宜増減	主として炭水化物の消化異常症状の改善			
	パンクレアチン	パンクレアチン	消化作用				5%以上または頻度不明(過敏症)			本剤過敏症既往歴、ウシまたはブタ蛋白質に対し過敏症既往歴						直ちに飲み干す(小児が過って本剤を大量に停滞させたため、口内炎、口腔内潰瘍を起こしたとの報告がある)、粉末を吸入しない(気管支けいれん、鼻炎の報告)	1回1g、1日3回、適宜増減	消化異常症状			
	ピオヂアスターゼ	単味なし																			
	ピオタミラーゼ	単味なし																			

消化薬

変更前INU.1.13

変更後INU.1.11

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効能効果
胆汁成分	ウルソデオキシコール酸	ウルソ錠	利胆作用及び胆汁うっ滞改善作用、肝機能改善作用、胆石溶解作用										1.1回50mgを1日3回経口投与する。 2.1日600mgを3回に分割経口投与。 3.1日600mgを3回に分割経口投与する。増量する場合の1日最大投与量は900mgとする。 高齢者は用量に注意する	1.下記疾患における利胆(胆道(胆管・胆のう)系疾患及び胆汁うっ滞を伴う肝疾患)、慢性肝疾患における肝機能の改善、下記疾患における消化不良[小腸切除後遺症、炎症性小腸疾患] 2.外敵石灰化を認めないコレステロール系胆石の溶解 3.原発性胆汁性肝硬変における肝機能の改善
胆汁末			なし											
	デヒドロコール酸	デヒドロコール酸注射液											1日100~1000mgを1~3日間隔で静注。適宜増減	下記疾患における利胆(胆道(胆管・胆のう)系疾患および胆汁うっ滞を伴う肝疾患

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づき習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
粘 膜 修 復 成 分	アズレンスルホン酸ナトリウム	アズノール細粒	胃炎・胃潰瘍治療薬:粘膜炎抵抗作用を有し、潰瘍病巣を保護する				頻度不明(下痢・便秘・膨満感・腹痛・悪心・嘔吐等)										アズレンスルホン酸ナトリウムとして、1回2mg(アズノール細粒(0.4%)として0.5g、アズノール細粒(1%)として0.2g)を1日3回食前に経口投与(1回量を約100mLの水又は微温湯に溶解することが望ましい)。	胃炎・胃潰瘍における自覚症状及び他覚所見の改善	
	アルジオキサ	イサロン	胃炎・胃潰瘍治療薬:粘膜炎抵抗作用を有し、組織修復を促進する	テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤(併用薬の作用減弱)			0.1~5%未満(便秘)			透析療法(アルミニウム脳症・アルミニウム骨症)	腎障害、高齢者				アルミニウム脳症・アルミニウム骨症(腎障害患者)		アルジオキサとして1日300~400mgを3~4回に分けて経口投与	胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃炎の自覚症状及び他覚所見の改善	
	グリチルリチン酸塩	グリチルリチン酸モノアンモニウム・グリチロン注一号	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等				長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
	レ-グルタミン	グルミン顆粒	胃潰瘍・十二指腸潰瘍治療薬:粘膜炎抵抗作用を有し、組織修復を促進する					0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心、顔面紅潮)										1日1~2gを3~4回に分けて経口投与。高齢者では減量。	胃潰瘍、十二指腸潰瘍の自覚症状及び他覚所見の改善
	ゲファルナート	ゲファニールカプセル	胃潰瘍・十二指腸潰瘍治療薬:粘膜炎抵抗作用を有し、組織修復を促進する					0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心、上腹部不快感)、0.1%未満[口内炎、下痢、舌炎、AST(GOT)・ALT(GPT)軽度上昇]	0.1%未満(過敏症)		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人	高齢者						ゲファルナートとして1回50~100mgを1日2~3回経口投与。高齢者では減量。	急性胃炎・慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍・十二指腸潰瘍
	銅クロロフィリン塩																		
スクラルファート	アルサルミン錠	胃炎・消化性潰瘍治療薬:粘膜炎抵抗作用を有し、潰瘍病巣を保護する	クエン酸製剤(血中アルミニウム濃度上昇)、血清カリウム抑制イオン交換樹脂・ニューキノロン系抗菌剤・ジギタリス製剤・フェニトイン・テトラサイクリン系抗生物質等・甲状腺ホルモン剤・胆汁酸製剤(併用薬剤の吸収遅延・阻害、服用時間をずらす)キニジン(併用薬剤の排泄遅延)				0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心)、0.1%未満(嘔気等)	頻度不明(発疹、蕁麻疹等)		透析療法(長期投与によりアルミニウム脳症、アルミニウム骨症)	腎障害(アルミニウム脳症、アルミニウム骨症)、リン酸塩の欠乏(リン酸塩の吸収阻害)、経管栄養処置・低出生体重児および新生児発育不全、高齢者				アルミニウム脳症・アルミニウム骨症等		1回1gずつ、1日3回経口投与。	胃・十二指腸潰瘍、急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善	

制酸・健胃・消化・整腸を2以上標榜するもの

製品番号: 14

ノゾノド番号: 14

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
粘 膜 修 復 成 分	塩酸セトラキサート	ノイエルカプセル	胃炎・胃潰瘍治療薬: 防御因子を強化し、胃粘膜微小循環改善作用を有する					0.1~1%未満(口渇、悪心、嘔吐、下痢、便秘、胃部不快感・膨満感)、頻度不明(AST(GOT)上昇・ALT(GPT)上昇等)	0.1~1%未満(過敏症)				血栓(脳血栓、心筋梗塞、血栓性静脈炎等)、消費性凝固障害、妊婦または妊娠している可能性のある婦人						塩酸セトラキサートとして1回200mg(1カプセルまたは細粒0.5g)を1日3~4回食後および就寝前に経口投与	急性胃炎・慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍
	ソファルコン	セスファルコカプセル	胃炎・胃潰瘍治療薬: 防御因子を強化し、粘膜保護・組織修復作用を有する					頻度不明(便秘、口渇、胸やけ)	頻度不明(過敏症)				妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等						ソファルコンとして1回100mgを1日3回経口投与	急性胃炎・慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍
	メチルメチオニンスルホニウムクロライド	キャベジンUコーワ錠	胃炎・消化性潰瘍・慢性肝疾患治療薬: 防御因子を強化し、組織修復作用を有する。また肝障害改善作用を有する。					0.1%未満(便秘、下痢、あじ等)	0.1%未満(過敏症)					妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児、高齢者					1回25~75mgを1日3回経口投与。 高齢者では減量。	胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃炎における自覚症状及び他覚所見の改善、慢性肝疾患における肝機能の改善
消 泡 成 分	ジメチルポリシロキサン	ガスコン錠	胃内有泡性粘液除去作用を有し、消化管内ガスを駆除する					0.1~5%未満(軟便、胃部不快感、下痢、腹痛、嘔吐、嘔気、食欲不振、胃部重圧感、頭痛)										1. 1日120~240mgを食後又は食間の3回に分けて経口投与 2. 検査15~40分前に40~80mgを約10mLの水とともに経口投与 3. 検査3~4日前より1日120~240mgを食後又は食間の3回に分けて経口投与	1. 胃腸管内のガスに起因する腹部症状の改善 2. 胃内視鏡検査時における胃内有泡性粘液の除去 3. 腹部X線検査時における腸内ガスの駆除	

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌			慎重投与	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に関するもの		過量使用・誤使用のおそれ
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの									
副交感神経遮断成分	塩酸オキシンフェンサイクリミン 塩酸ジサイクロミン	レスボリミン錠 アセチルコリンによる収縮を抑制する。食物の腸管輸送速度を低下させる。		三環系抗うつ薬(抗コリン作用増強(散瞳、排尿障害、心悸亢進、頻脈、便秘、口内乾燥等)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強))		頻度不明(視調節障害、眼圧亢進、頭痛、頭重感、眩暈、眠気、口渇、便秘、悪心、嘔吐、腹部膨満・不快感、鼓腸、食欲不振、心悸亢進、排尿障害、心臓亢進、倦怠感、脱力感)、視調節障害・眠気等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心臓病、麻痺性イレウス、自動車等の運転注意(視調節障害、眠気)、	前立腺肥大症、心不全、不整脈等)、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦及び妊娠の可能性、授乳婦、小児					1回10~20mg、1日3~4回経口、適宜増減	下記疾患における痙攣:胃・十二指腸潰瘍、食道痙攣、幽門痙攣、胃炎、潰瘍性大腸炎、憩室炎、痙攣性便秘、過敏大腸症、小児の嘔吐、胆のう・胆管炎、胆石症、尿路結石症、月経困難症
	臭化メチルアトロピン	なし														
	臭化メチルベナクチジウム	配合剤のみ														
	臭化メチルオクタトロピン	バルビ錠 鎮痙作用、胃液分泌抑制作用		抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用の増強)、MAO阻害薬(本剤の作用増強)		頻度不明(視調節障害、口渇、悪心、胸焼け、便秘、下痢、食欲不振、腹部膨満感、排尿障害、眠気、めまい、頭痛、不快感、倦怠感)、視調節障害等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症状、顔面浮腫		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心臓病、麻痺性イレウス	前立腺肥大症、うつ血性心不全、不整脈、高血圧、肝又は腎疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、眠気、めまい)					1回10~20mg、1日2~4回経口投与、適宜増減	下記疾患における痙攣および疼痛:胃・十二指腸潰瘍、胃炎、腸炎、胆石症

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
臭化ブチルスコプラミン	ブスコパン錠	鎮痙作用、消化管運動抑制作用、胃液分泌抑制作用、膀胱内圧上昇抑制作用	三環系抗うつ薬(抗コリン作用(口渇・便秘・眼の調節障害増強)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強)、抗ヒスタミン薬(抗コリン作用増強))	薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	0.1~5%(視調節障害、腹部膨満感、鼓腸、便秘、排尿障害、頭痛、頭暈感、心悸亢進)、頻度不明(口渇)、視調節障害・眼瞼を起す事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症	出血性大腸炎、緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心障害、麻痺性イレウス、本剤過敏症既往歴、細菌性下痢	前立腺肥大症、うつ血性心不全、不整脈、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊娠又は妊娠の可能性、自動車等の運転注意(眼の調節障害)	細菌性下痢(治療期間の延長をきたすおそれ)					1回10~20mg、1日3~5回経口投与、適宜増減	下記疾患における痙攣：胃・十二指腸潰瘍、食道狭窄、幽門痙攣、胃炎、腸炎、腸仙痛、痙攣性便秘、機能性下痢、胆のう・胆管炎、胆石症、胆道シスキネジー、胆のう切除後の後遺症、尿路結石症、膀胱炎、月経困難症	
臭化チメピジウム																
ヨウ化イソプロバミド																
ロートエキス	ロートエキス散純正	ムスカリン様受容体において副交感神経性及び外因性のアセチルコリンと総合的に拮抗。胃酸又はペプシン分泌抑制、抗ストレス潰瘍作用、胃細胞保護作用、小腸運動または腸液分泌抑制作用、鎮痛作用、血圧降下作用、鎮けい作用	三環系抗うつ薬、フェノチアジン系、MAO阻害薬、抗ヒスタミン薬、イソニアジド(本剤の作用増強)	頻度不明(散瞳、しゅう明、霧視、視調節障害、口渇、悪心、嘔吐、便秘、排尿障害、頭痛、頭暈感、めまい、頻脈)、視調節障害・散瞳・しゅう明・めまい等を起す事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症、顔面紅潮	緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心疾患、麻痺性イレウス	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、散瞳、しゅう明、めまい)							1日20~90mg、2~3回分服、適宜増減	下記疾患における分泌、運動亢進ならびに疼痛：胃酸過多、胃炎、胃・十二指腸潰瘍、痙攣性便秘	
鎮痙成分	塩酸バロバリン	平滑筋の弛緩作用、血管平滑筋の異常緊張を抑制し、血流量を増加。内臓平滑筋を弛緩し、鎮けい作用。	レボドパ(レボドパの作用減弱)	頻度不明(心悸亢進、血圧上昇、めまい、眼瞼、頭痛、便秘、口渇、食欲不振、心か節痛、顔面潮紅、発汗)	頻度不明：アレルギー性肝障害、過敏症、(便秘、口渇、心悸亢進)	本剤過敏症既往歴	緑内障、高齢者、妊婦、小児							1日200mg、3~4回分服、適宜増減。高齢者は減量。	下記疾患における内臓平滑筋の痙攣症状：胃炎・胆道系疾患、急性動脈硬化、末梢循環障害、冠循環障害における血管収縮と症状の改善。	

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ			適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
局 所 麻 酔 成 分	アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末端 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。			0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 満(下痢)、メ トヘモグロビ ン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)		本剤過敏症既往 歴…… 乳幼児(内用・坐 剤の場合)	高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性		(内用) 口内にしびれ等 を残さないため 速やかに飲み下 す (外用) 眼には使用しな いこと[軟膏・液 剤の場合]、誤っ て吸入しないこと [散布剤の場合]	長期連続投 与回避	(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適 宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、 液剤、散布剤として、また は、1個中200mg~300mg を含有する坐剤として適宜 患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴 う疼痛・嘔吐: 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患にお ける鎮痛、鎮 痙・外傷、熱 傷、日焼け、 皮膚潰瘍、掻痒 症、痔疾	
局 所 麻 酔 成 分	オキセサゼ ン	ストロカイン 錠	局所麻酔作 用、ガストリン 遊離抑制作 用、胃酸分泌 抑制作用、胃 腸管運動抑 制作用			0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘、下痢、 頭痛、眩 暈)、頻度不 明(眠気、脱 力感)	0.1~5%(過 敏症)		本剤過敏症既往 歴	高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性、小 児		口内にしびれ等 を残さないため 速やかに飲み下 す	長期連続投 与回避	1日15~40mg、3~4回分 服。高齢者は減量		

止瀉薬

製品群No. 16

ワークシートNo.14

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
評価の観点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発、悪化のおそれ)	使用法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	長期使用による健康被害のおそれ					
腸内殺菌成分	アクリノール													
	塩化ベルベリン	キョウベリン錠100	腸内腐敗、醗酵抑制作用、蠕動抑制作用(弛緩作用)、胆汁分泌作用(腸管内における病原菌の増殖を抑える)			0.1~5%未満(便秘)	出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢患者(治療期間の延長)	高齢者	出血性大腸炎、細菌性下痢	長期・大量投与を避けること。	塩化ベルベリンとして、通常成人1日150~300mg(本剤1.5~3錠)を3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症		
	クレオソート													
	タンニン酸ベルベリン	エルベン散	タンニン酸ベルベリンは、腸内でベルベリンとタンニン酸に分解され、その部位でのチフス、赤痢、大腸菌に対する殺菌作用とタンニン酸の収れん防腐作用を期待できる。			頻度不明(便秘)	出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、細菌性下痢(治療期間の延長)	高齢者	出血性大腸炎、細菌性下痢	長期・大量投与を避けること。	タンニン酸ベルベリンとして、通常成人1日150~300mgを3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症		
収れん成分	次硝酸ビスマス	次硝酸ビスマス	収れん作用並びに粘膜面被覆保護作用を有する。胃・十二指腸粘膜に存在するHelicobacter pylori菌に対して抗菌活性がある。	精神神経系障害(頻度不明)		0.1~5%未満(嘔気、食欲不振)、頻度不明(歯齦腫、舌、口腔内などに青色又は青黒色の着色)	慢性消化管通過障害又は重篤な消化管潰瘍(ビスマスの吸収による副作用が起こる)・出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	便秘、結腸瘻造設術、回腸瘻造設術又は人工肛門造設術を受けた患者、消化管憩室、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	出血性大腸炎、細菌性下痢	原則1ヶ月に20日程度(1週間以内)の投与	洗腸には使用しないこと。	長期連続投与(1日3~20g)で昏睡、錯乱、運動障害などの精神神経系障害が現れた	次硝酸ビスマスとして、通常成人1日2gを2~3回に分経口投与する。高齢者では減量。妊婦・小児には、投与量、投与期間などに注意。	下痢症
	次没食子酸ビスマス	次没食子酸ビスマス「エビス」	二次的にゼン動運動を抑制し、腸内硫化水素と結合しガス刺激を緩和し、止瀉作用を現す。	精神神経系障害(頻度不明)		頻度不明(歯齦腫、舌、口腔内等に青色又は青黒色の着色)、0.1%~5%未満(嘔気、食欲不振)	慢性消化管通過障害又は重篤な消化管潰瘍(副作用が起こる)、出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	便秘、結腸瘻造設術、回腸瘻造設術または人工肛門造設術を受けた患者、消化管憩室、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	出血性大腸炎、細菌性下痢	原則1ヶ月に20日程度(1週間以内)の投与	洗腸には使用しないこと。	長期連続投与(1日3~20g)で昏睡、錯乱、運動障害などの精神神経系障害が現れた	次没食子酸ビスマスとして、通常成人1.5~4gを3~4回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。妊婦・小児には、投与量、投与期間などに注意。	下痢症
収れん成分	タンニン酸アルブミン	タンナルピン「ホエイ」	本剤は、腸管内で腸液により徐々に分解してタンニン酸を遊離し、全腸管に緩和な収れん作用をあらわすことにより、止瀉作用を示す。	経口錠剤(併用により相互作用が減弱)	塩酸ロベラミド(塩酸ロベラミドの効果が減弱)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	頻度不明(肝障害、便秘、食欲不振)	出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、牛乳アレルギー(ショックまたはアナフィラキシー様症状を起こす)、本剤過敏症の既往歴、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	肝障害、高齢者	出血性大腸炎、細菌性下痢	長期・大量投与で肝障害	タンニン酸アルブミンとして、通常成人1日3~4gを3~4回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症	

止瀉薬

製品群No. 16

ワークシートNo.14

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な 副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪 化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・ 悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	機能効果		
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるも の	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
吸着成分	カオリン																		
	沈降炭酸カルシウム	沈降炭酸カルシウム	制酸作用	テトラサイクリン系抗生物質(併用薬剤の効果が減弱)、他の併用薬剤(併用薬剤の吸収・排泄に影響)、牛乳[milk-alkali syndrome(高カルシウム血症・高窒素血症・アルカローシス等)]、ビタミンD(高カルシウム血症)			5%以上又は頻度不明(高カルシウム血症・アルカローシス等の電解質失調・腎結石・尿路結石・悪心・嘔吐・便秘・下痢)、0.1%未満(胃酸の反動性分泌)	5%以上又は頻度不明(過敏症)		甲状腺機能低下症又は副甲状腺機能亢進症(症状悪化)		胃酸の反動性分泌						沈降炭酸カルシウムとして、1日1~3gを3~4回に分割経口投与。高齢者では減量。	胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎、薬剤性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)の症状の改善
	乳酸カルシウム	乳酸カルシウム「エビス」	血清カルシウム値が低下した際に、カルシウム値を上昇させる。本剤は鎮静、けいれん軽減の作用がある。カルシウムは無機栄養素としても重要で、骨の主成分である。	ジキタリス製剤(ジキタリス中毒)、テトラサイクリン系抗生物質(テトラサイクリン系抗生物質の作用が減弱)、ニューキノロン系抗菌剤(ニューキノロン系抗菌剤の作用が減弱)			頻度不明(高カルシウム血症、結石症、腹部膨満感、胸やけ、軟便等、頭痛、心窩部不快感)	頻度不明(過敏症)		高カルシウム血症(高カルシウム血症を増悪)、腎結石(腎結石を増強)、重篤な腎不全(高カルシウム血症)					長期投与により血中及び尿中カルシウムが高値になることがあるので、長期投与する場合には定期的に血中又は尿中カルシウムを検査することが望ましい。結石症。			低カルシウム血症に起因する下記症候の改善 チタニウム下記代謝性骨疾患におけるカルシウム補給 妊婦・産婦の骨軟化症 発育期におけるカルシウム補給	
	ヒドロキシナフトエ酸アルミニウム																		

止瀉薬

製品群No. 16

ワークシートNo. 14

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
その他の止しや成分	塩酸ロベラミド	ロベミンカプセル/ロベミン細粒	止瀉作用 マウスおよびラットにおけるヒマシ油またはプロスタグランジン誘発下痢を強く抑制する。消化管輸送能抑制作用 マウスの小腸輸送能を用量依存的に抑制する。健康成人において硫酸バリウムの消化管内通過時間を延長させる。また、成人下痢患者(外国人)の小腸通過時間を服用前に比較して有意に延長した。 蠕動抑制作用 モルモットの摘出回腸ならびに生体位小腸および結腸の蠕動を抑制する。モルモットを用いたin vitro実験から、本剤の蠕動抑制作用には、腸壁内コリン作動性ニューロンの機能の抑制および腸管の輪状筋方向の伸展によるアセチルコリンとプロスタグランジンの放出の抑制が関与していると考えられている。 抗分泌作用 ラットを用いた実験で、プロスタグランジンまたはコレラトキソンの投与によって起こる水、NaおよびClの腸管腔内への分泌を吸収の方向へ逆転させた。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	ケイ酸アルミニウム・タンニン酸アルブミン(本剤の効果が減弱)、リトナビル・キニジン(本剤の血中濃度が上昇)	イレウス(0.1%未満)、巨大結腸(頻度不明)	アナフィラキシー様症状(0.1%未満)、シオック、皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)(頻度不明)	頻度不明(頭痛、傾眠傾向、鎮静、筋緊張低下、散瞳、疲労、体温低下、発熱、尿閉、消化不良、口内不快感、味覚の喪失) 0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTPの上昇、腹部不快感、悪心、腹痛、嘔吐、食欲不振、口渇、眠気、めまい、発汗、倦怠感) 0.1~5%未満(腹部膨満) 眠気、めまいが起こることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させないよう注意すること。	0.1~5%未満(過敏症)	動物実験において、大量投与で薬物依存性が認められているので、観察を十分に行い、用量および使用期間に注意すること。	出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長) 抗生物質の投与に伴う偽膜性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長) 低出生体重児、新生児および6カ月未満の乳児(過量投与により、呼吸抑制、全身性痙攣、昏睡等の重篤な副作用の報告) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴、細菌性下痢(治療期間の延長) 潰瘍性大腸炎(中毒性巨大結腸を起こす)、8カ月以上2歳未満の乳幼児	重篤な肝障害、紅門疾患、小児、高齢者、妊婦または妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、	本薬の薬理作用上、便秘が発現することがあるので、用量に留意し、便秘が発現した場合、投与を中止すること。また、特に便秘を避けなければならない紅門疾患等の患者には注意して投与すること。	止瀉剤による治療は下痢の対症療法であるので、脱水症状がみられる場合、輸液等適切な水・電解質の補給に留意すること。	外国で、塩酸ロベラミド液剤の過量投与により昏睡、呼吸抑制、縮瞳、筋緊張低下、傾眠等の中毒症状がみられ、また、腸管壊死に至る麻痺性イレウスにより死亡に至った例が報告されている。外国で、乳幼児(特に2歳未満)に過量投与した場合、中枢神経系障害、呼吸抑制、腸管壊死に起因する麻痺性イレウスを起こしたとの報告がある。			塩酸ロベラミドとして、通常、成人に1日1~2mgを1~2回に分けて経口投与する。 なお、症状により適量増減する。用量に留意すること。注意して投与すること。〔一般に高齢者では生理機能が低下している。〕妊婦または妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。*授乳中の婦人には本剤投与中の授乳は避けさせること。小児等に対する安全性は確立していないので、投与しないことが望ましい。動物実験において、大量投与で薬物依存性が認められているので、観察を十分に行い、用量および使用期間に注意すること。		